

# 「おおち山くじら」による地域ブランド創出への取組

～ “おおち山くじら物語り” 今、はじまるイノシシの地産地消から “地産地生” へ～

島根県美郷町役場 産業振興課  
安田 亮

【はじまり・・・平成11年度までの現状:旧邑智町】

- 1. しっほ確認による駆除活動奨励金
- 2. “囲いワナ”の設置数の増大 農業者からは設置のための補助金要望の声
- 3. 駆除は猟友会だのみの県市町村 平成11年度駆除の権限移譲・・・島根県から市町村へ  
猟友会である駆除班員と農家の軋轢  
「駆除活動に狩猟原理・・・ 駆除活動＝猟友会活動という考え

〔私の感じた被害対策の現場:1町職員としての視点から〕

「本音の語られない・聞こえない会議」、「トラブル恐れる市町村担当者」、「頭を下げる担当者」  
「市町村職員の被害対策の仕事とは・・・? 当時、片手間な仕事」

〔普段語れない・話されない現実〕

- 1. 被害対策の形骸化と偏重
- 2. 右肩上がりの被害対策費
- 3. 行政の役割のあいまいさ(市町村職員の怠慢)



結果	<u>依存体質</u>	行政依存	補助金依存	猟友会依存	組織力の欠如
	<u>見えないビジョン</u>	市町村の被害対策による農林業振興			
	<u>断片的・縦割りな被害対策</u>	アンバランスな被害対策			

【平成11年度末から平成12年度の旧邑智町の駆除事業改革】

- 1. 駆除班の再編 5つの駆除班(5人の駆除班長)から1つの駆除班(一人の駆除班長:ピラミッド型の体制へ)  
“なわばり”意識の排除 エリアの拡大・町全体での取り組み  
農業者側の視点での駆除班編制 農業者の狩猟資格「網・わな(甲種)」取得推進  
(45人 69人) 組織から“狩猟意識”の排除
- 2. 駆除概念の明確化 駆除と狩猟の区別・・・狩猟は猟友会(あくまで任意の法人)、駆除のトップは市町村長  
H11年度権限委譲・・・町は駆除要項に猟友会加入条件を明記していない。
- 3. 奨励金確認方法 「しっほ確認」から役場職員の「現場確認」へ(平成12年4月から現在に至る) 住民の合意形成  
駆除額実績 : 平成11年度732頭 平成12年度299
- 4. 補助事業費の削減 「囲いワナ」の管理方法の改善と「囲いワナ」から「箱ワナ」への捕獲方法への転換・誘導  
一斉駆除出動手当、囲いワナ補助金の廃止、狩猟期間の駆除許可廃止

【合併事務】 法定協議会による邑智町式の体制(H16.10.1 町村合併) H17.5.13 美郷町有害鳥獣駆除班

# 「イノシシ被害対策・・・なぜ、資源化なのか？その必要性」

## 1. イノシシは町の名悪役スター

私の町で関心度の高いものは何か？よく会話で話題に上るものは？

## 2. イノシシの資源化の取り組みの必要性

### (1) イノシシ被害問題の背景・捉え方 「なぜ、資源化なのか？」

住民・美郷町(旧邑智町) 「もったいない」「もったいないではおわせない」 「これほど住民の関心事のある話題提供者はいない」

### (2) 美郷町の捉え方・・・そして「特産品」の意味とは

イノシシの被害の問題は、人口の減少や農地の荒廃、生息環境の変化等による中山間地域の抱える過疎と高齢化の問題を代弁しており、「農業者のみの問題」としての捉え方から、「少子高齢化に起因する住民一人ひとり町全体の問題」であること。資源化に取り組み、住民を巻き込んでイノシシ被害の真の問題を提起できる。 中山間地域の閉塞性の打破・起爆剤

## 3. イノシシの流通・産地が確立されていないのはどうしてか？

平成10年度以降、島根県でイノシシの話題がありながら、中山間地域の特有の産物として産地化されていない理由又は島根ブランドの1つにならないその理由、研究用イノシシのきちんとしたサンプルが集まらない理由

## 4. 西日本をはじめとしたイノシシ(シカ)の被害対策と資源化、その潮流

- ・空回りする被害対策と資源化の模索
- ・総合的な被害対策としての県市町村の役割の不明確さ
- ・市町村合併による取り組みの格差の拡大
- ・現場の声と被害対策のギャップ



H16.7.29 囲いワナに捕獲されたイノシシ(写真:安田)



H16.6.13 イノシシ資源化研修会(囲いワナに集まる駆除班員)

## 5. 資源化の真の意味とは・・・

「資源化は駆除イノシシを使ってこそ意味がある」

「冬イノシシに拘ると被害対策の抑制につながる(一部の商業利益とレジャー)」 冬イノシシのみの特産化は被害対策につながりにくい。

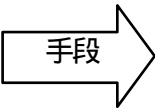
被害対策推進の環境づくり・・・

総合的な被害対策へ (点) 駆除・防護 (線) 駆除・防護 + 特産化 (面) 地域振興策 産業化(地域ビジョン)  
自立型被害対策への第一歩 ・特産化による収益の還元(依存体質からの脱却)  
・なわばりのない組織協力体制(担い手不足を補う1手段・集落全体の取り組み連携)  
組織力の充実

(事例) リスクを背負う(誰がやるのか) ・農村女性の参画機会の提供 ・キャンプ場や道の駅での食肉販売許可 など

## 6. イノシシの評価と現在的美郷町の動き

- (1) 眠れる資源としての活用
- (2) 合理的な駆除処理方法
- (3) 農業者等の精神的負担の軽減
- (4) 話題性・住民の関心度が高い
- (5) ビジョンづくり



### 自立型の被害対策への拠点づくり

(被害対策・資源化・情報集積)

既存の処理場 + (例) 惣菜等加工施設整備

- (理由) ・常駐(女性の参画) 被害対策・資源化専門性の向上  
 ・イノシシ集積 研究材料  
 ・農林産物の集積・加工による総合的な食産業興しほか  
 ・経費の軽減と労働力の解消  
 ・山くじらツーリズム

#### 自立型被害対策への移行

目的: 依存体質からの脱却

- ・補助金の軽減(町単独、中山間直接支払い)
- ・市町村合併による被害対策の広域化(猟友会による連携困難、会員高齢化)
- ・担い手の育たない環境(特に第1種・銃器)

資料4: 島根県の狩猟税と免許取得状況

#### 自立型被害対策の支援

産官学の連携(的確な被害対策情報と実践)

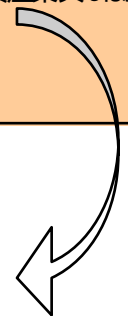
被害対策における町の役割: 被害対策技術の受け入れやすい環境・体制づくり

拠点組織の充実: なわばり排除による被害対策集団の拡大と広域化

総合的な対策

専門集団化・専門家の受け入れ環境の充実  
 対策の広域的な対策・広域化の実現(ネットワーク)

生業



## 7. “おおち山くじら”としての地産地生 … 「地域ビジョンなくして被害対策は取り組めない・語れない」

今後、「いかに一人でも多くの住民を巻き込んで町全体で“おおち山くじら”を育てていくか」

流れ: (点) 駆除・防護      (線) 駆除・防護 + 特産化      (面) 地域振興策 産業化(地域ビジョン)

基本の充実

新開発・継続  
 (女性・飲食店の参画)

町全体を上げての取り組み  
 (有機農業の推進・ツーリズム・宿泊施設の参画・人と自然の共生)



「山くじら」といえば美郷町、美郷町といえば「山くじら」と言われるような地域ブランド創出に向けて町が商標登録認証(H17.11.4)の  
 絵図 H17.1.28 出願